千葉市内の平安時代窯跡について

——金親町・中原窯跡——

倉　田　義　広※

Ⅰ　はじめに

従来、下総国に属した地域での須恵器生産に関する資料は、古墳・奈良・平安の各時代を通しても皆無であり、関東各地との比較研究を行なう上でも生産遺跡の確認は急務であった。

加曽利貝塚博物館には、この地域に須恵器窯が存在したことを明瞭に物語る試堀調査の資料が収蔵されていたため、また筆者がわずかな期間ではあるが勤務していたという奇縁もあってここに資料を紹介させていただく次第である。

なお、遺物のなかには、従来の報告書などで、**須恵質土器・くすべ焼成土器**（文献1）、あるいは**土師質須恵器**（文献2）などさまざまな名称で呼び表わされていた土器も見受けられる。

しかし、これらの土器のほか、いわゆる「須恵器」と呼ぶにふさわしい土器も伴出しており、この両者を製作技法・形態・胎土において識別することは不可能にちかく、また色調などに頼った分類方法では、恣意的な結果に終るのではないかとの危惧もあるため、試堀資料の総てを「須恵器」として報告する（註）。

Ⅱ　千葉県内の須恵器窯跡

県下を見渡しても、須恵器窯跡の資料は極めて少ない。管見によるかぎりで、その概要を別記してゆくことにする。

周准古窯址群

大正４年に発見され、その後昭和２年の『君津郡誌』（文献３）においてその存在が報告された窯跡群である。小櫃川流域の君津郡中村練木字寺崎に所在し、窯体は未確認ながら灰原と考えられる土層から須恵器の甕、有蓋坏が出土し、**寺崎製陶所**として報告されている。

※ 千葉市教育委員会　文化課

註　将来、この一群の土器について時間的変遷・空間的広がりがある程度みきわめられれば、その時点で新たな名称を付すことに異論はなく、それまでは胎土・色調等の詳細な記録を残すことで対処したい。

この寺崎製陶所は、その後『日本の考古学Ⅵ』において倉田芳郎・坂誥秀一両氏によって取り上げられ、7世紀の年代観と周准古窯址群の名称が与えられた(文献4)。

しかし、その全容については、今もって不明瞭な部分が多く疑問の余地が残されている。

永田・不入窯跡群

昭和49年には、市原市新谷で永田・不入窯址の発掘調査が行なわれた。その報告(文献5)によれば、永田・不入の両群合わせて18基の須恵器窯跡が確認され、その窯構造については地下式登窯と半地下式登窯の2タイプが認められている。

永田・不入窯で生産された須恵器は、坏・高台付の坏、埦、蓋、盤が主体であり、他に円面硯、浄瓶、多嘴瓶、平瓶、壷、甕、甑などがある。

坏類の底部は、回転糸切り技法によって切り離した後、轆轤回転を利用した篦削り調整を施こしている。

操業の年代については、「須恵器窯設置の契機を国分寺造営に求め、国分寺建立の詔が発布された天平13年(741年)を窯成立の上限年代として捉える。」(文献6)とする須田勉氏の説が有力である。

須恵器窯跡を発掘調査した例としては、この永田・不入窯跡が県下で最初の遺跡であり、その成果が公表されたものとしても、現在までのところ唯一の資料である。

石川窯跡群

永田・不入窯跡の北方約3.7㎞、市原市石川に石川窯跡群の所在が明らかになった。これは駒沢大学・倉田芳郎教授によって発掘された千葉・南総中学遺跡の周辺部の一般調査によって確認されたものである(文献7)。その製品は、前述した永田・不入窯跡のものと類似する点が多く、同一系譜の窯として把えることができる。

坏底部の切り離し技法では、回転糸切り後無調整のものが主体をなし、報告者の酒井清治氏は、8世紀末葉から9世紀初頭の年代を与えている(文献8)。

以上述べたように、千葉県下の須恵器生産遺跡は周准、永田・不入、石川の3ケ所(註)が報告されているほか、市原市と境を接する千葉市の東南端の土気地区においても窯跡が確認され、立正大学・坂誥秀一教授によって発掘調査が実施されている。

しかしこれらはいずれも上総国に属するものであり、下総国に属する地域では確認されておらず、古代の両地域を比較する上でも下総国における窯跡の発見が重要な課題として残されていた。

註　酒井清治氏は、その報文の中で周准、永田・不入、石川の「他に未発表の窯址が3ケ所ある。」と註記されている。

Ⅲ 中原窯跡群

1. 発見の経緯

昭和49年頃、市内遺跡分布地図を作成中の加曽利貝塚博物館に、審議委員・武田宗久氏より金親町周辺に布目瓦等の出土する地点があるとの御教示があり、担当職員が現地踏査の結果緩斜面に農道を開削してできた断面で土器片を含む灰層を確認したという。その際、灰層の上方の地点を1㎡の範囲で試掘したところ、地表下0.5ｍの焼土混じりの灰を含む土層中に多量の遺物の包含を確認しているが、坏の一部は重なって出土したという。

本稿においては、この試掘資料をもとに中原窯跡を紹介するとともに、近接した地点で一般調査で確認されている宇津志野窯跡についてもふれておきたい。

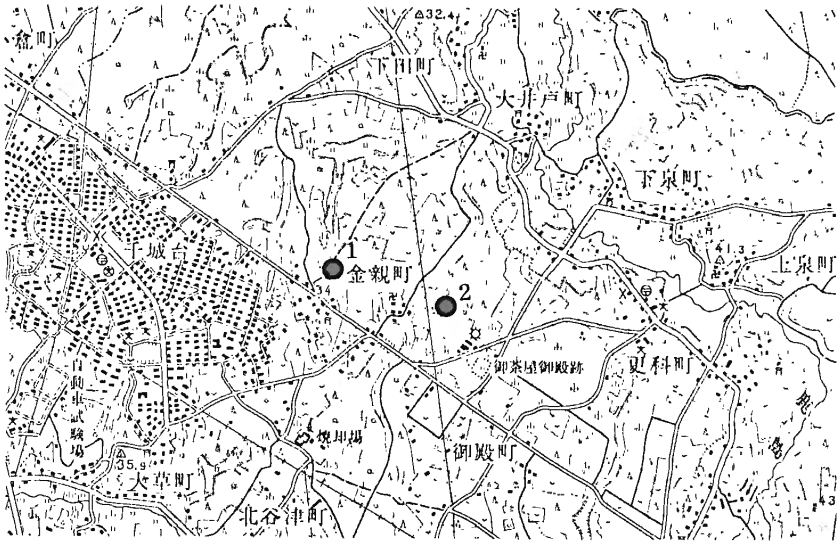
2. 位　置

千葉市金親町(字)中原754番地に所在し、国鉄千葉駅の東方約8.3㎞に位置する(図・1)。

緩斜面を農道が横切る崖面に、須恵器片を含む幅5～6ｍの灰層2ケ所と窯体の一部が認められ、窯跡発見の端諸ともなった。窯跡は鹿島川の本谷から枝分かれして南西方向に伸び、次いで南方に向かう小支谷の最奥部の左岸、西向きの緩斜面に成田層の上部を掘り込んで築窯されている。標高は28ｍ前後を測る。

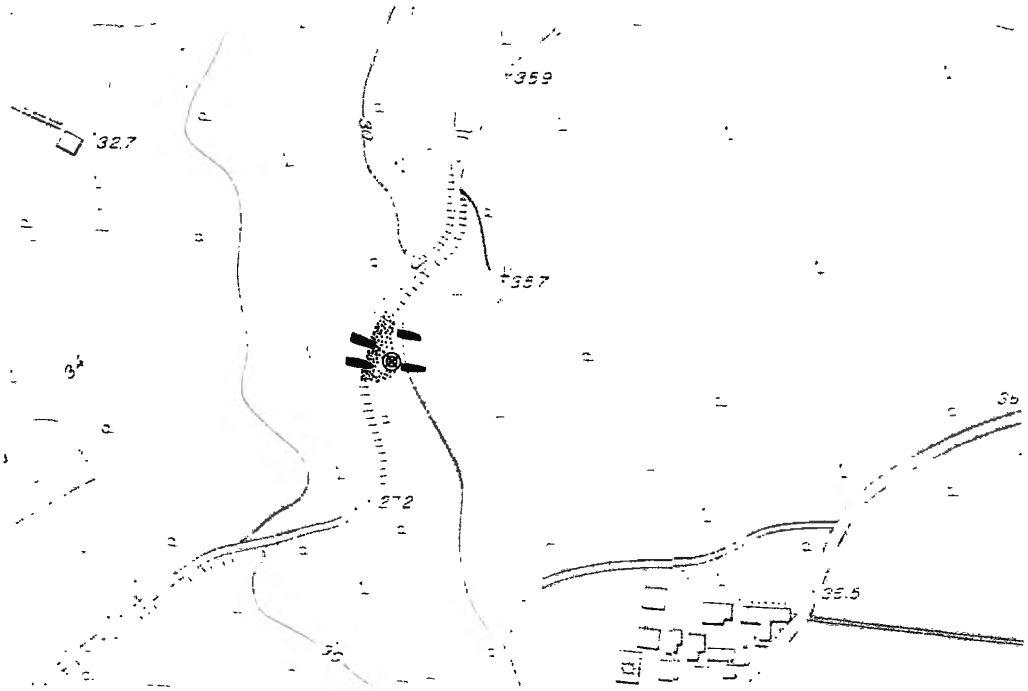
崖面での土層観察によれば、窯体の上部を灰層が覆う状況であることから、この地点では上・下の2ケ所に築窯された可能性が強い。検土杖による探索の結果を合わせると、上段部分に2基・下段に2基程度の存在が考えられる(図・2)。

なお、今回報告する遺物は、試掘地点からすると、上段部分の窯跡に伴なう物原もしくは灰原からの出土であろうと考えている。



図・1
遺跡位置図

1.中原窯跡
2.宇津志野窯跡



図・2　中原窯跡群配置予想図　（1：2,500）　灰層分布範囲　⊗ 試掘地点

3.　試掘地点の性格

試掘調査時の記録をもとに、筆者が現地踏査した際の所見ならびに遺物の観察結果から総合的に検討した結果、当地を須恵器製造窯跡と判断するに至った。それらの所見のうち主なものを列記する。

① 西面する小支谷に向かう緩傾斜面の中ほどに平坦面が造りだされており、その中央部が試掘個所である。この平坦部下方の斜面が削り取られてできた崖面に、幅5～6 *m*の範囲で広がる灰層2ケ所と、窯体と思しき火熱を受けた土層2ケ所を確認している。

② 周辺部の検土杖による探索によると、平坦部とその上方斜面との地形変換点付近で、地表下1 *m*で焼土粒が多量に認められる。

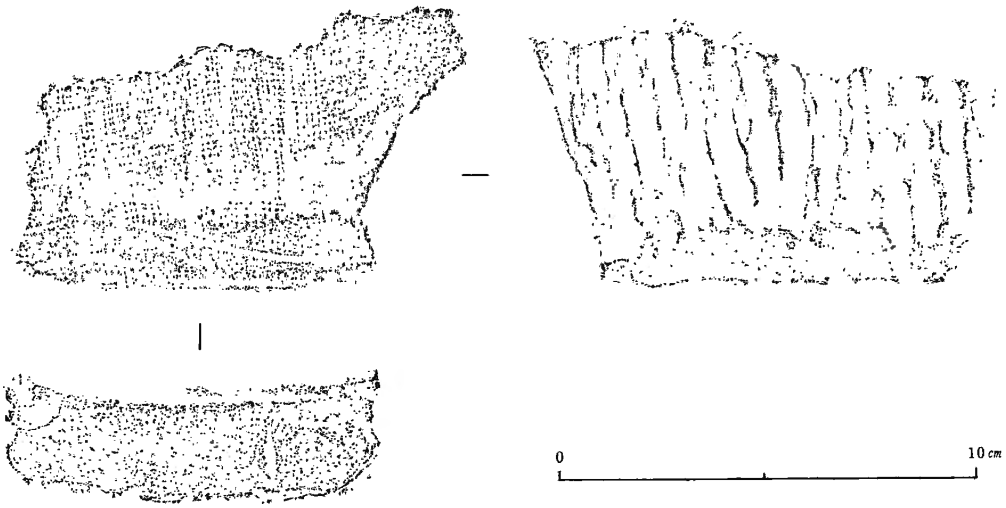
③ 1 *m*四方という試掘面積の割りには、遺物総量が多い。

④ 遺物は各種の器種が認められるが、いずれも一定の技法で製作された須恵器であり、土師器は認められない。

⑤ 土器のなかには、歪みが著しいものや、底部に焼成時に生じた亀裂や破裂痕をもつものが多い。

⑥ 土器の内外面に、擦れ等の使用痕は認められない。

以上の所見からみて、試掘個所は窯跡の灰原または物原ではないかと思われる。なお、踏査時に灰層中に女瓦片1点（図・3）の包含を認めており、須恵器と瓦を併焼した兼用窯であった可能性も指摘しておきたい。



図・3　女瓦拓影

4. 遺物について

試掘資料の組成は、供膳形態の坏・貯蔵形態の広口壷、煮沸形態の甕および同様形状の甑の4器種より成る。

このうち図化し得たものは、坏19点、広口壷4点、甕3点、甑2点さらに壷の底部と思われる2点（図化した壷4点のなかに同一個体を限定できない）である。もとより、これだけが出土した遺物の総てではなく、特に壷、甕、甑の類では全容を窺えるものが少なく、その大半を割愛せざるを得なかった。ちなみに口縁部によって集計すると、図化したもの以外に坏3点、壷12点、甕、甑類（両者は同様の形状を呈するので、口縁のみでの類別は不可能である）6点前後となる。

個々の土器が示す色調は、灰色を呈するものから赤褐色、黒色のものまでバラエティに富むものの、胎土に白色微砂粒が含まれる点では共通している。製作技法の上では、坏類は轆轤整形の後回転篦切りを行ない、壷・甕類では回転を利用した粘土紐積み後、胴部は叩き整形（土器の外面に縦目の叩き痕跡、内面に無文の当具痕跡を有する）しており、口縁部は折り返すなどの方法により肥厚させる特徴を持つ。

なお、試掘資料のなかにはいわゆる土師器と呼べるものは皆無であったことを特記しておきたい。

以下、各器種について述べることにする。

(1)　坏　（図・7、8）

確認できる限りでは、右回転轆轤による整形後、回転篦切りによって底部を切り離している。底部および体部下端に施こす調整手法には、Ⅰ　回転篦削りと　Ⅱ　手持ち篦削りの2手法が認められる。しかし、同一個体における底部と体部下端に対する調整手法は一定である。

このⅠ、Ⅱ類はさらにその器形、色調等の特徴から、Ⅰ－a種、b種、Ⅱ類a種、b種、c種d種に細別することができる。

Ⅰ類

回転篦切りによって底部を切り離し、口縁を下に向けて回転台上に伏せて置き、回転を利用して体部下端と底部を篦削りしている。2種に細別する。

a種　（1～5）

体部下端と底部全面を入念に篦削り調整している。

口径12㎝、底径7㎝程度であり、口径と底部の差は他に比べて少ない。

やや厚みのある体部は、底部から垂直気味に直線的に立ち上がり口縁にいたる。

色調は、いわゆる須恵器の特徴ともいえる灰色を呈し、器肉の芯の部分まで完全に還元した状態にある。胎土中には白色微砂粒が顕著に認められ、全体に砂っぽい。器肌は粗く吸水性に富む。また焼け歪みが著しいことも本種の特徴である。

b種　（6～11）

底部の篦削り調整はやや雑であり、切り離し痕跡を残すものが多い。口径12㎝、底径7㎝程度である。体部は底部からやや開きながら内反気味に立ち上がり、口縁部で緩く外反する。また強い撫で整形のために、体部の螺旋状起伏が著るしい。

色調は、灰、黄灰、灰オリーブ色のものが認められるが、器肉の芯の部分では赤褐色を呈するものが大半を占める。

胎土中には、白色微砂粒も見られるがⅠ－a種ほどではなく、また赤褐色あるいは黒褐色を呈する鉱物粒子(註)も認められ、全体的に均質な感じを受ける。

Ⅱ類

回転篦切り後、底部および体部下端を手持ち篦削りする類である。器形等から4種に細別できる。

a種　（12～16）

底部の調整は入念で、その全面を一定方向に削り取っている。

口径13㎝、底径7㎝程度である。

体部は、底部から開き気味に直線的に立ち上がり、口縁部で緩く外反する。

註　赤褐色あるいは黒褐色を呈する粒子については、高橋一夫氏が「混和材として用いられた土器の破砕片（文献9）」とされたものや、柿沼修平氏が「スコリア状の赤い粒子（文献10）」とされたものと同一の含有物と思われる。筆者としては、この粒子の存在が土器にも瓦にも普遍的に認められることから、酒井清治氏の「Loam 中の Scoria（文献8）」とする説に従う。

色調は、灰オリーブ色を呈し、よく還元されている。胎土中に白色微砂粒を含む。

b種　（17）

口径 13.6 *cm*に対して底径は 8.4 *cm*で試掘資料中もっとも大きい底部を持つ。

体部は、薄い底部から内反気味に立ち上がる。色調はオリーブ黒色を呈する。

胎土中には白色微砂粒のほか赤褐色鉱物粒子が認められる。

底部には焼成時の破裂痕が認められ、実用に耐えない。

c種　（18）

底部全面を直交する二方向への篦削りを行ない。また体部下端を大きく削り取っているため底部との境が不明瞭となっている。

口径 12.3 *cm*に対し底径 5.1 *cm*である。

厚みのある底部から内反気味に立ち上がり、口縁部で外反する。

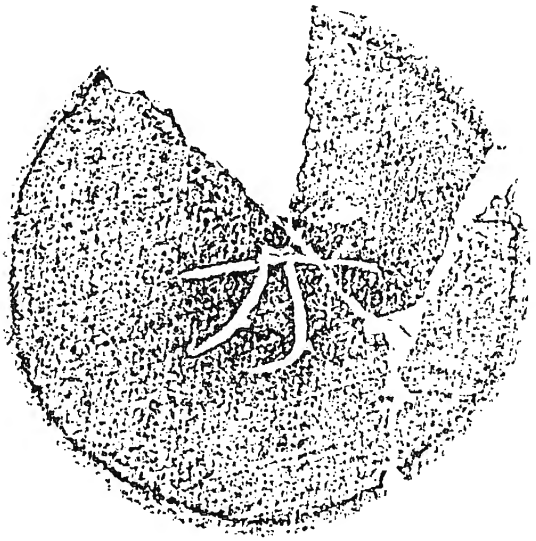
色調は、外面が赤褐色であるのに対し内面は暗黄灰色を呈する。胎土中には白色微砂粒が含まれる。

d種　（19）

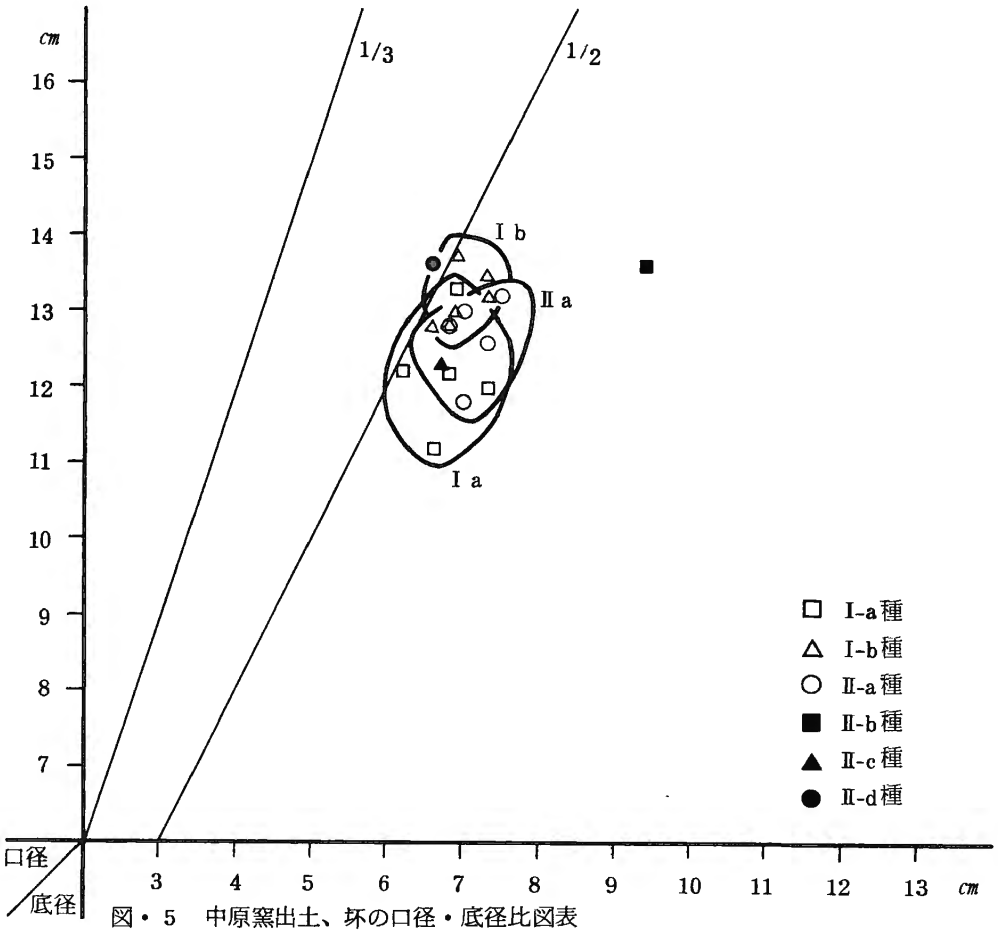
器形・調整手法はa 種と類似するが、色調・焼成具合・含有物によって区別できる。

色調はオリーブ黒色であり、焼成はa 種に比べてやや甘い。胎土中には白色微砂粒のほか、a 種には認められなかった赤褐色鉱物粒子を含む。

底部には、「万」の刻書が施こされている。



図・4　坏底部にみられる刻書



図・5　中原窯出土、坏の口径・底径比図表

以上に述べたごとく2類6種に種別してきたが、本稿で扱った資料が全て試掘資料という制約があるものの、この種別がいかなる意味を持つのか検討してみたい。

まず、各種間に見られる調整手法の差違をひとまず度外視して、大まかな形態の類似性を、口径・底径比図表（図・5）に見ると、Ⅱ－b種とした1点を除いた各種は、1/2強の線上によく収束しており、そこには時間差を読み取ることは困難である。

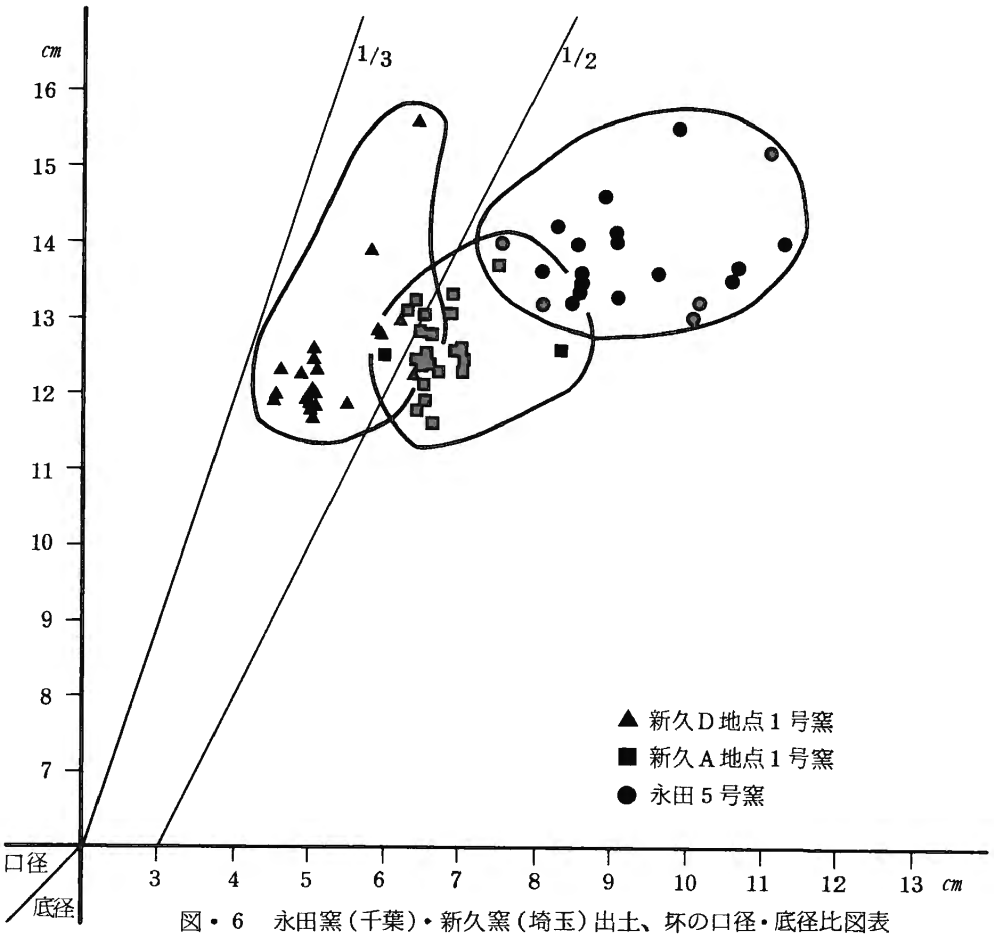
次に、色調の差違については、焼成時期の差として把えることができるであろう。

特徴的なものにⅠ－a種がある。この種は高温度による完全な還元炎で焼成されており、色調は灰色を呈する。胎土中に多量に含まれる砂粒は、その耐火度を増進させることを期待したものと考えられる。

しかし、現実にこの土器を見ると歪みが著しく、また多量に用いた混和材のために須恵器本来の特質であった保水性を欠き、破損しやすいという欠陥をさらけ出している。

すなわち、他地域と同等な須恵器を作り出そうとした彼らの努力は、生産効率の悪い、また製品としての完成度に劣るという不充分な結果しか得られなかったものと考えられる。

それと比較して、Ⅰ－a種、Ⅱ－a種としたものは、やや甘い焼成であるが器肌は焼きしま



図・6　永田窯（千葉）・新久窯（埼玉）出土、坏の口径・底径比図表

っており、使用粘土に適した焼成技術であったといえよう。

そこでⅠ－a種からⅠ－b種、Ⅱ－a種等への変遷が比較的短い時間のなかで行なわれたと考えたい（註1）。

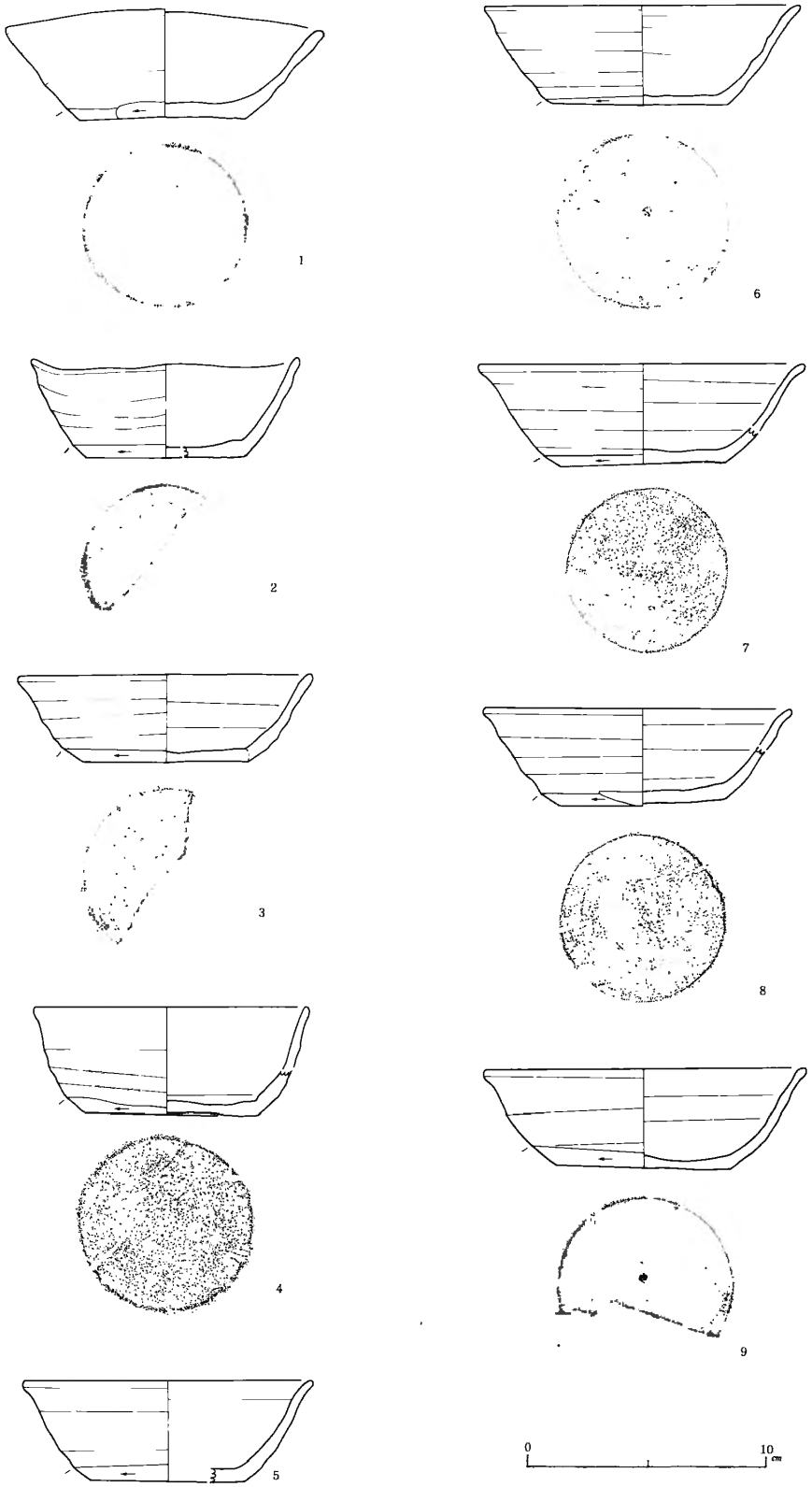
現在、この時期を前後して、須恵器製作の焼成技術が地域による時間差はあるものの、還元炎焼成から酸化炎焼成の方向に向かうことが指摘されており（註2）、それと関連した現象と見做すことも可能であるが、下総地方においてはその産出粘土の耐火度不足などの特性ゆえに、他地域に一歩先駆けて行われたのではないかと考えている。

註1.　この変遷を考えた場合、調整手法は回転篦削りから手持ち篦削りへと変遷したことになる。

2.　東北地方で桑原滋郎氏らが須恵系土器と呼ぶ酸化炎焼成の土器は、10世紀後半に成立したと考えられており（文献11）、また服部敬史・福田健司氏らによって試みられた南多摩窯址群須恵器編年でいうG14窯式一酸化炎焼成を特徴とする－（文献15）は、11世紀初頭の年代が想定されている（文献16）。

表－1　中原窯跡出土遺物計測表

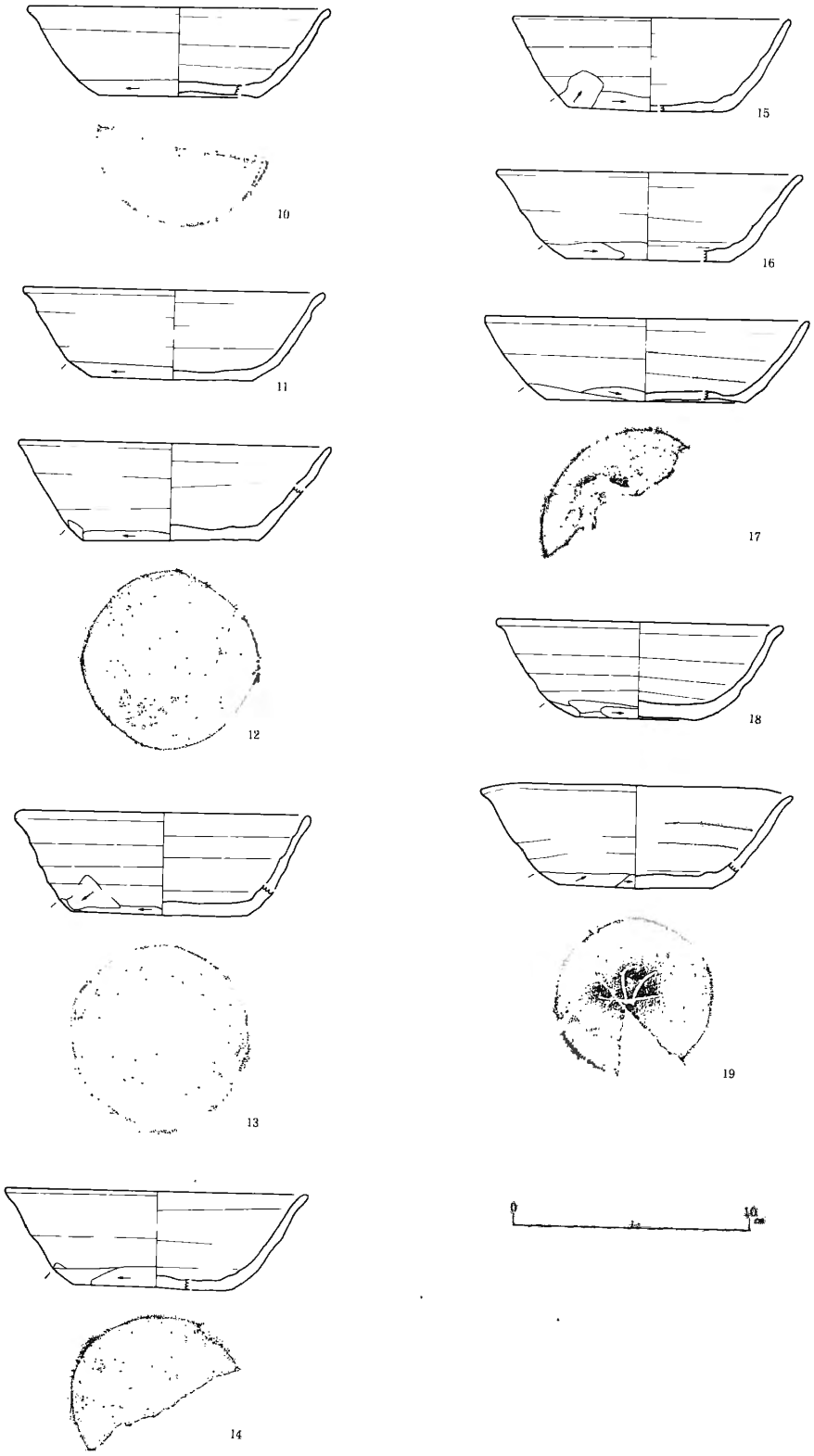
No.	器種	法量 cm	底部切り離し	底部調整	体部下端調整	色調	器形の特徴	備考
1	坏	口径 13.3 器高 4.6 底径 6.9	不明	全面の回転篦削り	回転篦削り	N4／0灰	右回転轆轤利用。底部から開き気味に直線的に立ち上がり、口縁部で肥厚する。歪みが著しい。	石英粒と多量の白色微砂粒を含む。器肌が粗い。体部の1/3を欠く。
2	坏	口径(11.2) 器高 4.2 底径 (6.6)	不明	全面の回転篦削り	回転篦削り	N4／0灰	右回転轆轤利用。底部から直線的に立ち上がり、口縁に至る。	石英粒と多量の白色微砂粒を含む。底部と体部の境に強い押さえがはいる。器肌が粗い。2/3を欠く。
3	坏	口径(12.4) 器高 3.8 底径 (7.0)	不明	全面の回転篦削り	回転篦削り	N4／0灰	右回転轆轤利用。底部から内反気味に立ち上がり、口縁部で緩く外反・肥厚する。	石英粒と多量の白色微砂粒を含む。器肌が粗い。2/3を欠く。
4	坏	口径(11.6) 器高 4.6 底径 7.3	不明	全面の回転篦削り	回転篦削り	N4／0灰	右回転轆轤利用。底部から内反気味に立ち上がり、口縁部で緩く外反・肥厚する。	石英粒と多量の白色微砂粒を含む。底部と体部の境に強い押さえがはいる。器肌が粗い。1/2を欠く。
5	坏	口径(12.2) 器高 4.2 底径 (6.2)	不明	全面の回転篦削り	回転篦削り	N4／0灰	右回転轆轤利用。底部から内反気味に立ち上がり、口縁部で緩く外反する。歪みが著しい。	石英粒と多量の白色微砂粒を含む。器肌が粗い。3/4を欠く。
6	坏	口径 13.2 器高 4.3 底径 7.3	回転篦切り	全面の回転篦削り	回転篦削り	5Y5／2 灰オリーブ	右回転轆轤利用。底部から開き気味に直線的に立ち上がり、口縁部で緩く外反する。	白色微砂粒、石英粒と若干の黒褐色粒を含む。ほぼ完形。
7	坏	口径(13.7) 器高 4.3 底径 6.9	回転篦切り	全面の回転篦削り	回転篦削り	2.5Y6/1 黄灰	右回転轆轤利用。底部から内反気味に立ち上がり、口縁部で緩く外反・肥厚する。	白色微砂粒、石英粒と若干の黒褐色粒を含む。体部の1/3を欠く。
8	坏	口径(13.0) 器高 4.1 底径 (6.9)	回転篦切り	全面の回転篦削り	回転篦削り	5Y5／1 灰	右回転轆轤利用。底部から開き気味に立ち上がり、口縁部で緩く外反する。	白色微砂粒、石英粒と若干の黒褐色粒を含む。体部上半の2/3を欠く。
9	坏	口径 13.5 器高 4.1 底径 7.3	回転篦切り	全面の回転篦削り	回転篦削り	5Y5／2 灰オリーブ	右回転轆轤利用。底部から内反気味に立ち上がり、口縁部で肥厚する。	白色微砂粒、石英粒と若干の赤褐色粒を含む。1/2を欠く。



図・7　中原窯跡　出土遺物実測図

表－2　中原窯跡出土遺物計測表

No.	器種	法量 cm	底部切り離し	底部調整	体部下端調整	色調	器形の特徴	備考
10	坏	口径(12.8) 器高 4.2 底径 (6.8)	回転篦切り	全面の回転篦削り	回転篦削り	5Y4/1 灰	右回転轆轤利用。底部から開き気味に直線的に立ち上がり、口縁部で緩く外反・肥厚する。	白色微砂粒と石英粒を含む。底部と体部の境に強い押さえがはいる。2/3を欠く。
11	坏	口径(12.8) 器高 3.8 底径 (6.8)	回転篦切り	回転篦削り	回転篦削り	2.5Y4/1 黄灰	右回転轆轤利用。底部から開き気味に直線的に立ち上がり、口縁部で緩く外反・肥厚する。	白色微砂粒、石英粒と若干の赤褐色粒を含む。1/3を欠く。
12	坏	口径(13.2) 器高 4.1 底径 7.5	不明	全面の手持ち篦削り(一定方向)	手持ち篦削り4回で1周	7.5Y5/1 灰	底部から開き気味に、直線的に立ち上がり、口縁に至る。	白色微砂粒と石英粒を含む。体部の2/3を欠く。
13	坏	口径(12.6) 器高 4.4 底径 7.3	不明	全面の手持ち篦削り(不定方向)	手持ち篦削り7回で1周	5Y5/1 灰	底部から直線的に立ち上がり、口縁部で肥厚する。歪みが著しい。	白色微砂粒と石英粒を含む。体部と底部の境に強い押さえがはいる。体部の1/2を欠く。
14	坏	口径(12.8) 器高 4.1 底径 (6.8)	不明	全面の手持ち篦削り(一定方向)	手持ち篦削り	5Y5/2 灰オリーブ	右回転轆轤利用。底部から開き気味に立ち上がり、口縁部で外反する。	白色微砂粒と石英粒を含む。底部と体部の境に強い押さえがはいる。2/3を欠く。
15	坏	口径(11.8) 器高 4.0 底径 (7.0)	不明	手持ち篦削り	手持ち篦削り	5Y5/2 灰オリーブ	右回転轆轤利用。底部から直線的に立ち上がり、口縁に至る。	白色微砂粒と石英粒を含む。3/4を欠く。
16	坏	口径(13.0) 器高 3.8 底径 (7.0)	不明	手持ち篦削り	手持ち篦削り	5Y5/2 灰オリーブ	右回転轆轤利用。底部から開き気味に直線的に立ち上がり、口縁に至る。	白色微砂粒と石英粒を含む。3/4を欠く。
17	坏	口径(13.6) 器高 3.6 底径 (8.4)	不明	手持ち篦削り	手持ち篦削り	(外面) 2.5Y4/1 黄灰 (内面) 5Y3/1 オリーブ黒	底部から内反気味に立ち上がり、口縁に至る。	白色微砂粒、石英粒と若干の赤褐色粒を含む。底部に焼成時の亀裂が生じている。2/3を欠く。
18	坏	口径(12.3) 器高 4.1 底径 (5.1)	回転篦切り	全面の手持ち篦削り直交する二方向	手持ち篦削り	(外面) 5YR5/6 明赤褐 (内面) 2.5Y5/2 暗灰黄	右回転轆轤利用。底部から内反気味に立ち上がり、口縁部で外反する。	白色微砂粒と石英粒を含む。2/3を欠く。
19	坏	口径(13.6) 器高 4.4 底径 6.6	不明	全面の手持ち篦削り(一定方向)	手持ち篦削り6回で1周	5Y2/2 オリーブ黒	底部から開き気味に、直線的に立ち上がり、口縁部で外反する。	白色微砂粒、石英粒と若干の赤褐色粒を含む。体部の3/4を欠く。底部に「万」の刻書。



図・8　中原窯跡　出土遺物実測図

表－3　中原窯跡出土遺物計測表

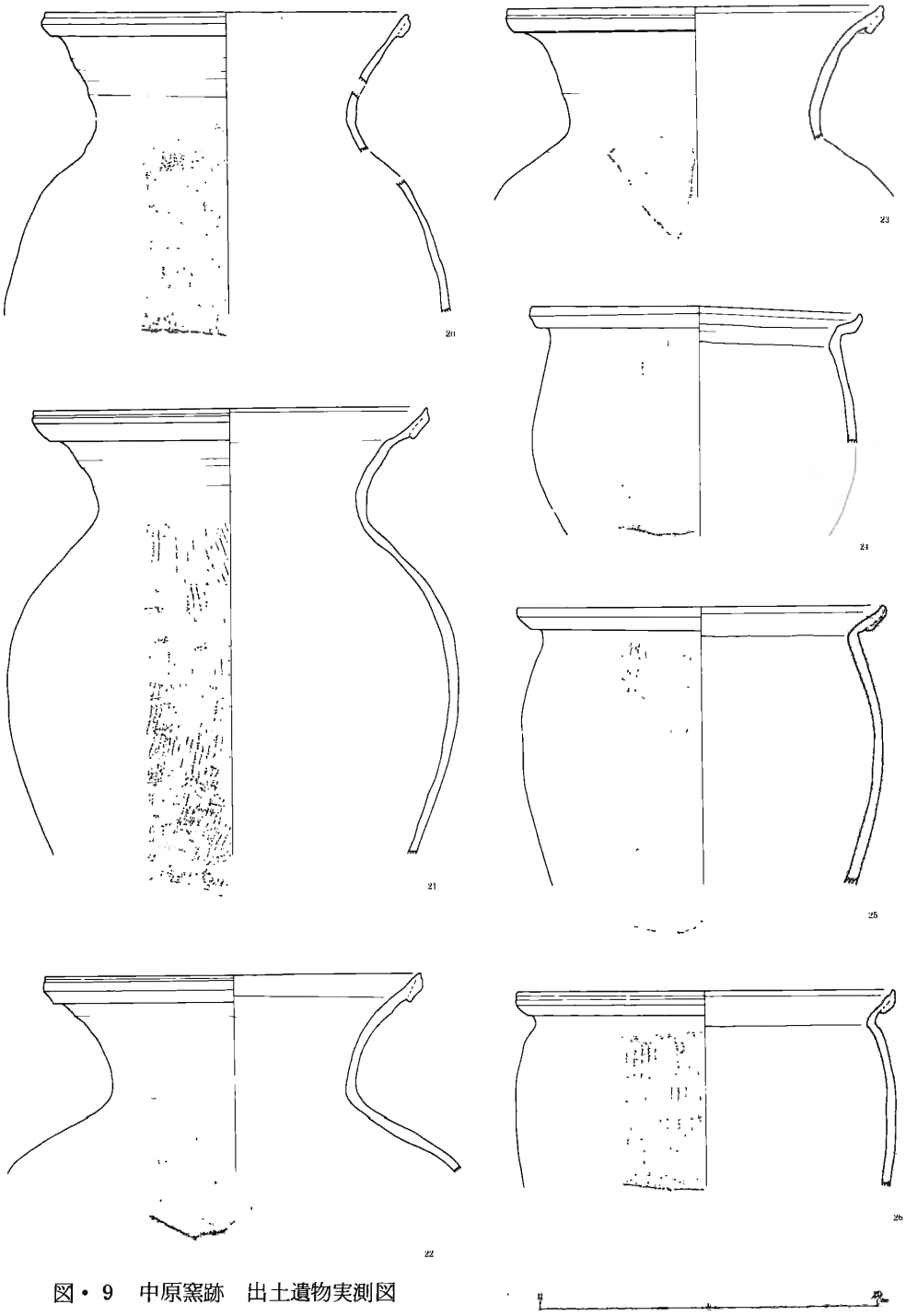
番号	器種	法　量cm	色　　調	製作技法上の特徴	器形の特徴	備　　考
20	広口壷	口径（21.7） 現存高18.2	5YR 5/1 灰	粘土紐積み成形後、胴部内面に無文の当具をあて、外面を縦目条線を残す叩き締めをおこなう。 口縁部は折り返し口縁とし、その後、頸部以上を轆轤回転利用の横撫でにより細部形状を挽き出す。 胴部内面の凹凸は、撫でにより平滑にする。	最大径を胴部中央にとり、頸部ですぼまり反転し、開きながら直線的に伸び、肥厚した折り返し口縁に連なる。	白色微砂粒、石英粒と若干の黒褐色粒を含む。器肌には無数のひびがみられる。
21	広口壷	口径　23.4 現存高 26.2	5YR 4/3 にぶい赤褐	同　上	最大径を胴部上位にとり、大きく外反して開き頸部を経て、折り返し口縁に連なる。	白色微砂粒、石英粒と若干の赤褐色粒を含む。
22	広口壷	口径　22.4 現存高 11.5	2.5YR4/4 にぶい赤褐	同　上	同　上	白色の微砂粒、石英粒と若干の赤褐色粒を含む。
23	広口壷	口径（22.4） 現存高 11.7	5YR 4/3 にぶい赤褐	同　上	同　上	白色の微砂粒、石英粒と若干の赤褐色粒を含む。
24	甕	口径　19.6 現存高 13.8	5YR 3/1 黒褐	同　上	同　上	白色の微砂粒、石英粒と若干の赤褐色粒を含む。
25	甕	口径　22.0 現存高 16.5	5YR 4/3 にぶい赤褐	同　上	最大径を胴部中央にとる。内反気味に垂直に立ち上がる胴部は、頸部で短かく外傾し、折り返し口縁に連なる。	白色の微砂粒、石英粒と若干の赤褐色粒を含む。器肌がやや粗い。
26	甕	口径（22.4） 現存高 11.7	N 5 / 0 灰	同　上	最大径が胴部中央と口縁部にある。ほぼ垂直に立ち上がる胴部は頸部で短かく外反し、折り返し口縁に連なる。	白色微砂粒、石英粒を含む。焼成は堅緻である。

⑵　広口壷　（図・9－20～23）

器形は、その中央あるいは上位に最大径を持つ胴部から、急速にすぼみながら大きく弓なりに外反する口頸部へと連なり、口縁部は上端を折り返して肥厚した口縁を作りだしている。

製作技法は、回転台上に粘土板を置いて底部とし、粘土紐積みによって成形する。その後で胴部では内面には無文の当て具を当て、外面には縦目の平行条線が残る叩き締めを行ない、下端部は回転利用の篦削りにより調整している。口頸部から口唇部にかけては、轆轤回転を利用した撫でにより細部の形状を挽き出している。

なお本器種のものと思われる底部例２点のうち、28は底部外面に回転台表面の年輪痕をもち



図・9　中原窯跡　出土遺物実測図

27は撫でによって消し去っている。

(3)　甕　（図・9－24～26）

甑に比較して広い底部から内反気味に、垂直に立ち上がる胴部を経て、口頸部で短かく外傾し、肥厚した折り返し口縁へと連なる。製作技法は、基本的に広口壷と一致する。

表－4　中原窯跡出土遺物計測表

番号	器種	法　量cm	色　調	製作技法上の特徴	器形の特徴	備　考
27	甑	口径（34.0） 器高　29.8 底径（13.6）	5YR 4/6 赤褐	基本的には広口壷、甕と同様である。胴部下位は、右方向への篦削りをおこなう。底部は、中央に轆轤回転利用の篦削りにより円孔を穿ち、周縁に扁桃形小孔4個を配する。	最大径を口縁部にとる。小さな底部から、ほぼ直線的に開き、頸部で短かく外傾し、折り返し口縁に連なる。	白色の微砂粒、石英粒と若干の赤褐色粒を含む。
28	甑	口径　32.2 現存高 17.8	N 4 / 0 灰	基本的には広口壷、甕と同様であるが口縁部は、粘土紐を積み足して折り返し口縁様を作り出す。胴部上位に方形の粘土を貼り付け、小耳とする。	最大径を口縁部にとる。小さな底部からほぼ直線的に開き、頸部で短かく外傾し直立する。胴部上位に小耳(双耳)を有する。	石英粒と多量の白色微砂粒を含む。器肌は粗く、ひび、貫入が著しい。
29	広口壷	現存高　7.0 底径　15.8	2.5YR 4/4 にぶい赤褐	胴部下位は、右方向への篦削りをおこない、底部外面は撫でにより平滑にする。底部内面の底部粘土と輪積み接合部は指頭による押さえの後、横撫でを施す。		白色の微砂粒、石英粒と若干の赤褐色粒を含む。底面中央に篦描きあり。「＋」
30	広口壷	現存高　9.0 底径　15.2	5YR 4/4 にぶい赤褐	胴部下位は、左方向の削りをおこなう。内面、底部粘土盤と輪積み接合部は、指頭による押さえの後、横撫でを施す。		白色の微砂粒、石英粒と若干の赤褐色粒を含む。底面には回転台表面の年輪を写している。

(4)　甑　（図・10－27、28）

器形・製作技法ともに甕のそれと類似しており、細片での両者の区別は困難である。しかし器形全体を見れば、最大径が口縁部にあり、小さな底部から直線的に開く胴部を持つなどの違いが認められ、これは両者がセットとして用いられることに起因するものと考えられる。

なお、胴上半に小耳（双耳？）を有することも、一応本器種の特徴と見做して差し支えないと考えている。

29は、色調、胎土等の特徴が坏Ｉ－ａとしたものと一致する。

(5)　女瓦　（図・３）

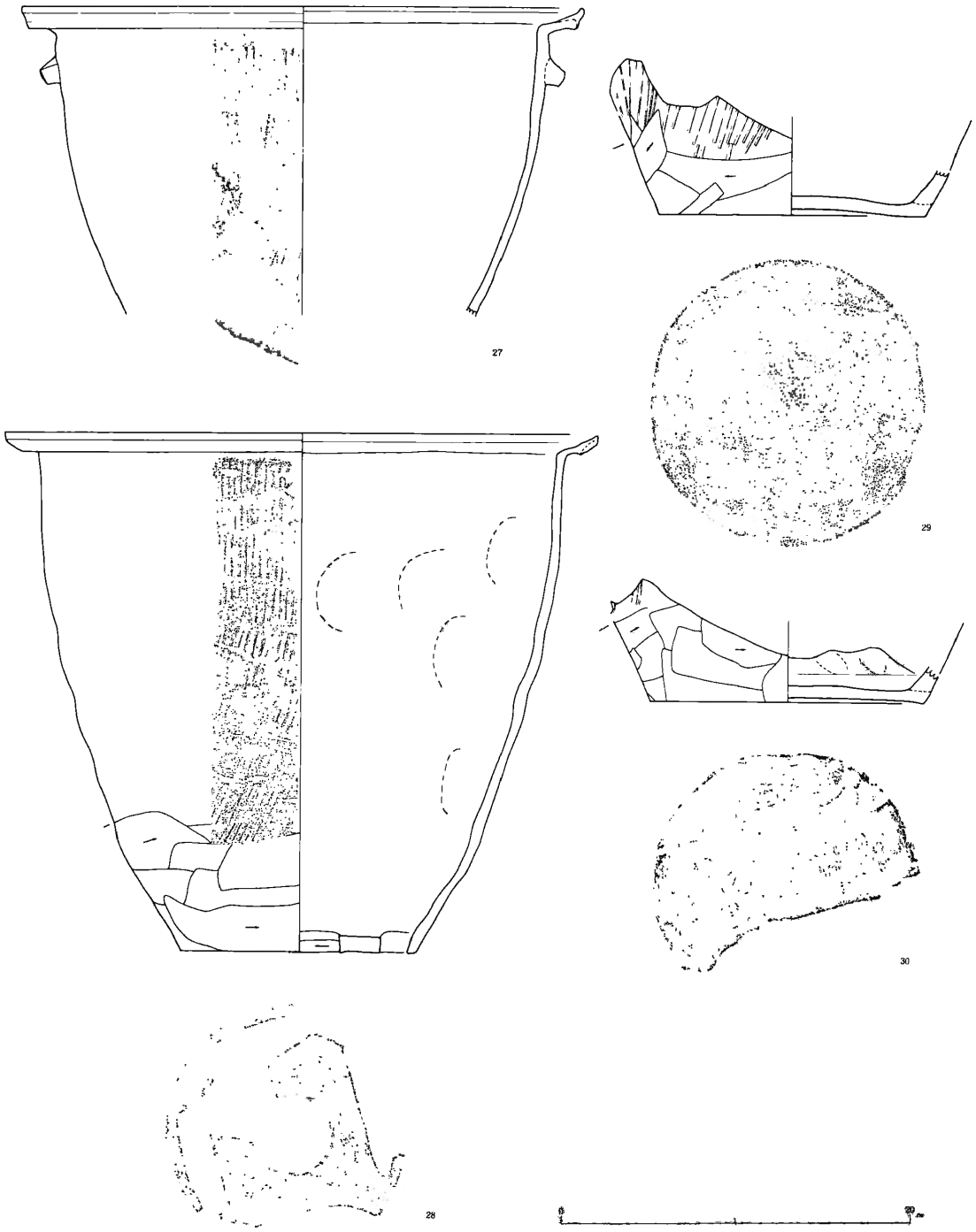
崖面・灰層中から採取したものである。色調－7.5ＹＲ4/4褐色。胎土中には白色微砂粒と若干の赤褐色鉱物粒子が含まれる。

5.　年代的位置づけ

さて、これらの土器はいつ頃に位置づけることが妥当であろうか。

坏の類別において述べたように若干の時間差が認められるものの、大局的にはほぼ同時期の所産と見做してよいと思われる。坏における形態・技法を主にして他遺跡と比較検討を試みることにする。

県内で、この時期の編年研究を行なったものに、松村恵司氏による山田水呑遺跡での分析があげられる（文献２)。その中で、中原窯跡資料に類似するものを探すと、形態・技法などの点



図・10　中原窯跡　出土遺物実測図

からみて土師質須恵器・第Ⅲ群とされたものに相当し、特に第Ⅲ群A類は中原Ⅰ－bに近似する。

この第Ⅲ群A類は、山田水呑遺跡第Ⅴ期に相当し、9世紀後半を中心とした年代が与えられている。

その後、佐々木和博氏は下総国分遺跡の出土遺物を再検討し、編年を試みられている（文献10）。

その中で、「9中紀中葉を中心とし、後葉にややかかる年代を想定」されている「Ⅱ期」に含まれる「須恵器坏B類」と中原窯跡資料との近似が認められる。

以上は集落遺跡での検討であるが、須恵器生産遺跡ではどうであろうか。

県下の須恵器窯跡で発掘調査・報告されたものは永田・不入窯跡だけであるが、その年代は8世紀代に位置づけられるものであるので、中原窯跡との対比だけでは不充分である。

そこで、関東地方で遺跡の実年代を想定する際しばしば引用される武蔵国入間郡・新久窯跡を参考にしたい。

新久窯跡は、C・D地点の須恵窯4基とA・E地点の須恵器も併焼した瓦窯3基からなる。調査者の坂誥秀一氏は、その報告(文献13)のなかで「A・E地点の瓦窯とC・D地点の須恵窯は、ともにその操業期間は並行していたと考えられ、それよりの出土須恵器は同一型式として把握」し、またその展開時期については、『続日本後紀』承和十二年(845)三月条に見える武蔵国分寺塔再建発願の記事との関連性を指摘されている(註)。

ところで、新久窯跡出土の坏はいずれも回転糸切り後無調整のもので、回転篦切り後回転あるいは手持ち篦削りを行なう中原窯跡資料とは、技法上大きな差違が認められる。

この切り離し技法を異にする両者を単純に比較することはできないが、口・底径比からみた形態の上では、9世紀中葉に上限を求められる新久A地点1号窯製品と中原窯製品が極めて近い数値を示すことが看取される(図・5、6)。

以上のことから、中原窯跡の年代を9世紀中葉から後葉の間に想定しておきたい。

Ⅳ 宇津志野窯跡

千葉市更科町(字)宇津志野に所在する。

大井戸町周辺で鹿島川本谷から南々西方向に侵入した小支谷の左岸に位置する。そこには、北から南方に向かう浅い谷が形成されているが、その東側斜面部－西方に向かって緩やかな傾きを示す－に窯跡が立地するものと考えられる。標高約25～27mを測る。

斜面裾部の開削面に土器片を包含する灰層の堆積が認められる他、窯跡であると断言するだけの論拠を持たないが、斜面部から谷底にかけて多量の土器片が出土したとの地元の方々から寄せられた情報やその地理的条件を考慮した結果、窯跡として把握するに至った。

採集した遺物で図化し得るものはないが、叩き目痕や折り返し口縁が認められ、また胎土・色調等中原窯跡資料と同様である。

註　新久窯跡については、その後A・E窯→C・D窯の2期に区別できるとする星野達雄氏の説(文献14)と、A・E窯→D窯→C窯の3期とする服部敬史・福田健司氏の説(文献15)が提出されている。

V おわりに

いささか冗長な資料紹介となってしまったが、下総国において平安時代前期に須恵器生産が行なわれ、従来の報告書において類別されている須恵器・土師質須恵器が生産遺跡においては共存し、また千葉県内に見られる須恵器焼成技術の変化は使用粘土の耐火度に主に起因することなどの点を指摘してきた。

確かに、筆者自身も集落遺跡の調査において須恵器とすべきか土師器とすべきか判断に苦しむ遺物に遭遇することがある。しかし現実に同じ生産遺跡で、同じ粘土・技術で焼かれた土器を、単に色調の差異のみをもって須恵器と土師質須恵器に類別したのでは、徒らに混乱を招く原因にもなりかねない。

筆者としては生産遺跡などの編年的研究により須恵器・土師器各々の製作技術の系譜がある程度辿れるまでは、いわゆる土師質須恵器などと呼ばれる土器の取り扱いは慎重であるべきだと考えている。そのため今回紹介した試掘資料を、従来のいわゆる須恵器の範疇で把え、報告した次第である。

文末となったが、未熟な筆者に資料紹介の機会を与えてくださった庄司克氏及び有益な御教示を種々賜った後藤和民・須田勉・服部敬史の各氏には、ここに紙面を借りて御礼申し上げたい。

引用・参考文献

1. 中村恵次他『八千代市村上遺跡群』1974　千葉県都市公社
2. 松村恵司　「出土土器の分類と編年」『山田水呑遺跡』　1977　山田遺跡調査会
3. 君津郡教育会　『千葉県君津群誌』　1927
4. 倉田芳郎・坂誥秀一　「古代・中世窯業の地域的特質　(1)東北・関東」『日本の考古学Ⅵ』1967　河出書房
5. 大川　清　『千葉県市原市永田・不入須恵窯跡調査報告書』1976　千葉県教育委員会
6. 須田　勉　「坊作遺跡の調査」『上総国分寺台発掘調査概要Ⅳ』1977　上総国分寺台遺跡調査団
7. 倉田芳朗　『千葉・南総中学遺跡』1978　市原市教育委員会
8. 酒井清治　「石川窯址」　上掲7　所収
9. 高橋一夫　「中馬場跡出土の土器について」『中馬場遺跡・妻子原遺跡』1972　日本国有鉄道常盤線複々線工事関係調査団
10. 柿沼修平　「若干の考察」『将門鹿島台』1975　鹿島市教育委員会
11. 桑原滋郎　「東北の須恵器」『世界陶磁全集　2日本古代』　1979
12. 佐々木和博　「下総国古代土器編年試論」『史館』　第十三号　1981
13. 坂誥秀一　『武蔵新久窯跡』　1971　雄山閣
14. 星野達雄　「いわゆる国分式土器について」『原始古代社会研究』3　1977
15. 服部敬史・福田健司　「南多摩窯址群における須恵器編年再考」『神奈川考古』12　1981
16. 服部敬史　「関東地方の窯址出土須恵器編年と年代」　シンポジウム「平安時代の土器・陶器」発表要旨　1981